



音楽界 コロナ禍の影響

八木 幸三 (札幌くらぶ顧問)



オンライン配信「吹奏楽ワンポイントアドバイス」
クラリネット三瓶佳紀さんとフルート川口晃さん

今年3月から7月にかけてコンサートが消えた。新型コロナウイルスの感染拡大は、私の予想をはるかに超え、全世界に長期的な影響を与え続けている。このコロナ禍で、一般的に言えることは、まず高齢者への試練だろう。感染による重症化率は高齢者が圧倒的に多い。高齢者が利用する介護施設や昼カラオケでのクラスター発生はその象徴だ。高齢な客層が多いクラシックコンサートも生の演奏がで

きなくなった。そうした中、札幌はいち早くオンラインによるライブ配信をおこない、またクラウドファンディングによる寄付も始めた。札幌以外の音楽家によるライブ配信も次々に始まった。しかし、コンピュータやスマホなどの扱いに不慣れた高齢者も多いはず。まさに新型コロナウイルスは、老人たちのライブスタイルを試しているかのようだ。さて、8月あたりからコンサートが少しずつ開催されるようになった。しかし、感染防止の面から、これまでとは違う様々な制約が課せられていく。マスク着用や手の消毒、検温など観客への要望もそうだが、主催する側にとって観客数の50%制限は実に深刻だ。

一定のレベルのステージをつくるためには、それなりの費用がかかる。自分のこれまでの経験からも公演経費と入場料の収支が同程度ならば「御の字」だったのが、観客数を制限されることで確実に赤字が出てしまう。しかも、それで感染が完全に防止できる保証はない。そこまでしてコンサートをすべきか悩んだあげく、私が会長を務める北海道作曲家協会のコンサートや自作のオペラ公演は1年延期するに至った。しかし、フリーランスを含むプロの音楽家たちは、今後の活動継続のために、これらの制約の中でも何とかコンサートを開催している。札幌もそのひとつだろう。

これまでのアンサンブルを伴うステージでは、直接対面が練習時から必要不可欠だ。コロナ禍により「ズーム」などを用いたオンライン練習は、やらないよりはマシだろうが、直接集まってくる練習にかなうはずがない。ステージ上で間隔を空けることも、アンサンブルにとってはマイナスだ。「3密の回避」はまさに音楽をつくる上で致命的な障害なのだ。再開されてからの札幌コンサート

を3回聴かせて頂いた。奏者の間隔を空け、管楽器にはアクリル板を設置するなどの対応は、これまでの優れたアンサンブルをおこなう上で、少なからず障壁となっているように思える。また、観客数も50%を下回っていることも気がかりだ。年齢層の高い観客は、コンサートが再開したとはいえ、出控える傾向にあることは十分に考えられる。この原稿を執筆中に、クラシックコンサートなどの観客数50%制限が解除されそうだと報道があった。しかし、前述したように高齢者の感染リスクは高い。

2年前、道内全域がブラックアウトになった時、電気のありがたさを身にしみ感じた。電気が使えなくなった数日後、それが復帰した時の喜びは今も記憶に残る。同じようにコロナ禍で生の音楽が聴ける喜びもまた同様だ。やはり音楽をはじめとする芸術文化は、人間にとって無くてはならないもの。ただ、電気と違って以前のままではない。やはりしばらくは多くの制約の中で音楽を楽しむ事になるだろう。そして、コロナ禍後に新たなスタイルのコンサートもあるかもしれない。それでも音楽を楽しむ気持ちは、これまでと同じであることを願いたい。

2年前、道内全域がブラックアウトになった時、電気のありがたさを身にしみ感じた。電気が使えなくなった数日後、それが復帰した時の喜びは今も記憶に残る。同じようにコロナ禍で生の音楽が聴ける喜びもまた同様だ。やはり音楽をはじめとする芸術文化は、人間にとって無くてはならないもの。ただ、電気と違って以前のままではない。やはりしばらくは多くの制約の中で音楽を楽しむ事になるだろう。そして、コロナ禍後に新たなスタイルのコンサートもあるかもしれない。それでも音楽を楽しむ気持ちは、これまでと同じであることを願いたい。

(写真協力 札幌交響楽団)



7月14日 試演会の様子



8月1日名曲コンサート

豊かな音楽でお返しを

突然長いお休みを頂きました。多くのコンサートが中止になりました。コンマスとしての自分は脆くも崩れ落ちました。札幌のためには何か率先して動くべきところ何もできず、メンバーから声を掛けてもらってもそれに応えることができず、ただただ無気力な日々。札幌の演奏動画で素晴らしい演奏を繰り広げる仲間たちを観ながら、自分は周りのメンバーから活かされ生かされているだけなのだ、と改めて再認識することになりました。

そんなある日、「クラウドファンディングでご支援を募る」というお話が出てきます。実は初めのうち「もった大変な業種もたくさんあるのに」とこのアイデアに心から賛同できなかったのですが、想像を遙かに上回るオケへの多くの心遣いに、「札幌の一員として胸を張って生きていていいんだ」と、とても温かい気持ちになりました。そして6月に入り鶴田さんが作成した札幌支援ポスター配布の協力を求める連絡が来た時に「これぞ天命」とようやく体が動き出し、気付いたら道内を一周していました。

その間も各メディアに札幌の

危機を取り上げて頂いたり、オフィスキュー様とコラボさせて頂くなど、多くの方々の協力、ご尽力があつて現在の活動再開に繋がっています。本来であれば全ての方々に礼を申し上げたい気持ちですが、やはりメンバー全員で心を合わせて豊かな音楽でお返しし続けること、これが何もできなかったコンマスとしての小さな決意です。皆様これからもどうぞよろしくお願い致します。

札幌交響楽団

コンサートマスター

田島高宏

演奏再開に向けて

いきなりでした。まさかこの様な日が来るとは…。

それまでは当たり前前に、公演の準備の為に仕込みをして練習の準備、演奏会へ、と日々を過ごしておりました。今回も長引くとは想定していませんでした。最初はこの際に、普段あまり

手のかけられない楽器庫やスタッフ部屋の清掃をしております。しかし1ヶ月を過ぎ、公演のキャンセルや延期が発生し始めました。またか…、いつま

で…。初めて先の見えない状況に對しました。メンバーは大丈夫であろうか？ スタッフ達は大丈夫であろうか？ 事務局メンバーは大丈夫であろうか？ 受け止める状況下で、それぞれの心身の状況だけが気になっていました。

各自それぞれの責を果たす為、自分の出来ることを考える日々が続いていたと思います。病は無くなると思いません。活

動再開が見えて来た時は、多少の不安はありましたが進むしかありません。舞台の人間は、舞台に出て生かされます。同じく舞台で働く人間も公演があつて活かされます。その為に今までにない新しい対応を検討しなくてはなりません。



7月試演会の準備 (写真協力 札幌交響楽団)

月程前からアクリル板の製作を始めました。距離を取ることが出来る会場なら良いのですが、金管楽器前や管楽器付近の弦楽器には常に用意しています。サイズも2種類用意して適材適所に対応しております。管楽器の為に吸水シート、消毒液の用意。雑菌にもまれて生きて来ましたが今まで以上に手を洗う機会は増えました。しかし、音を届ける場所がある！ 機会がある！ 何と幸せでしょうか！ ボタン一つでも楽に手に入る時代ですが、LIVEや総合芸術はその場でしか味わえません。その為に我々は存在し、共に感動しています。まだまだ課題はありますが、クリアしながら挑戦しながら進んでいきます。

この場をお借りしますが、存続の為、多くの皆様に御力を頂きました。本当に心より感謝しております。我々は姿を見せ、音を届けに歩みだします。これからも何卒よろしくお願ひいたします。

札幌交響楽団

ステージマネージャー

田中正樹



この休止期間中はひたすら時間を気にせず自分の気持ちの赴くままに生活していました。徐々に外出制限が緩和され



(右)初めて訪れた室蘭の地球岬展望台で。室蘭では室ガス文化センターと道の駅「みたら室蘭」で掲示をお願いしました。(上)道内行脚一箇所目、道の駅「サーモンパーク千歳」でポスターを貼ってもらいました。

コロナ禍の中の札幌ライブラリアン

新型コロナウイルス感染症はまだまだ油断できない状況が続いていますが、演奏会は徐々に戻りつつあります。コロナ禍の中での楽譜の準備や日常の業務について、札幌ライブラリアンの中村大志さんにお話を伺いました。

問：コロナ禍において、ライブラリアンのお仕事にどのような影響がありましたか。

中村さん：奏者間に通常よりも一定の距離をとる関係で、弦楽器は今まで2人で1つの楽譜を見ていたのを1人1冊にしています。用意する弦楽器の楽譜の量が倍になりました。これまではステージ内側の奏者が楽譜をめくっていたのですが、1人1冊になると全員が一斉に楽譜をめくることがなくなり、音が無くなってしまうという問題が発生することがあります。そのような

問：楽譜の価格と著作権の関係について教えてください。

中村さん：著作権が切れた作曲家の楽譜は比較的安価（とはいえいつもセットで数万はします）ですが、著作権がまだある作曲家の場合は高価なレンタル譜である場合が多いです。近年は新しい校訂版が出版されることも多く、そうなると同じ曲でも新しい版のものを購入する必要があります。

あるので、購入にかかる経費も結構必要となっています。

問：著作権がまだある作曲家はどのあたり（作曲家名や年代）が境目なのでしょうか。

中村さん：2018年12月にTPPが発効して、著作権はそれまでの死後50年から死後70年へと延長されました。それにより1968年以降に死去した作家はすべて著作権が死後70年となります。ただし、戦時加算対象国の作家の場合、作品の公表時期によっては、1958〜1967年に没した作家であっても著作権がまだある場合があります。欧米の作品を取り扱うことの多いオーケストラライブラリアンにとって、取り上げる作品が戦時加算の対象になっているかどうかには注意を払う必要があります。

問：近年ベートーヴェンの交響曲は新しい校訂版（新全集版）で演奏されることが増えているようですが、札幌の演奏会ではどうでしょうか。

中村さん：校訂版を使う指揮者も増えていますが従来の版を使う指揮者もまだ結構います。

問：珍しい楽曲の楽譜や異なった版のある楽譜などは、どのように調達していますか。

中村さん：指揮者と版について相談したうえで、出版社を調べ、購入やレンタルの手続きをします。

問：新しく購入した弦楽器の譜面には、ボウイングなどを事前に書き込んでおく必要がありますが、いつもどのように対応しているのでしょうか。

中村さん：新曲などでボウイングが無い楽譜の場合、コンサートマスター、そして各弦パート首席奏者にボウイングの決定を事前にお願ひし、それをこちらで写しています。この作業はアシスタントにお願いする場合があります。作業自体は長い曲になるとかなりの時間を必要と

問：指揮者が変わったとき過去の書き込みが演奏の妨げになるようなことはないのでしょうか。その都度パート譜を新調することはあるのでしょうか。

中村さん：基本は指揮者が変わっても同じ楽譜を使うことがほとんどです。指揮者の指示が特殊で、事前に細かく指示がある場合などは、いつものものは別のパート譜をその指揮者専用意図することがあります。具体的にはエリシユカやボンマーなどはそうでした。書き込みのほとんどは次にも役立つものが多いので、前回と変えて演奏する箇所はその部分を消して書き直すという作業をリハールで各奏者がおこなっています。

問：指揮者が使うスコア（総譜）についても、パート譜と一緒に調達し、管理しているのでしょうか。（通常、スコアは指揮者が持参）

中村さん：スコアはライブラリアンのチェック作業にも必要なのでパート譜とセットで持っています。リハール時にはホールに置いておいて、各奏者が確認できるようにしています。

問：書き込みされた楽譜は楽団にとって財産だと思いますが、古い楽譜から何か面白い発見がありましたら教えてください。

中村さん：たまに古い指揮者の名前が楽譜に書かれているのを見かけます。

問：歴代指揮者の書きみや札幌にしかない楽譜について、問い合わせや外部の音楽家が閲覧することは可能なのでしょうか。

中村さん：一般の方が閲覧できるようには現在していません。その指揮者が他のオーケストラで同じ曲を演奏する際には、貸出をオケ間で行なうことは多いです。

問：コロナ禍という状況の中でライブラリアンとして望むことがありましたら、コメントをお願いします。

中村さん：感染症と、人が集まらないと成り立たないオーケストラの形態とは相性が悪く、コロナ禍の下では当然活動に制約が発生せざるをえません。一時的な活動休止などは必要かもしれませんが、オーケストラが完全に途絶えてしまうと現状の状態まで再建するのは容易ではなく、存続のために力を貸していただけたいです。

コロナ禍の譜めくり対策

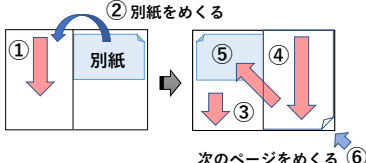
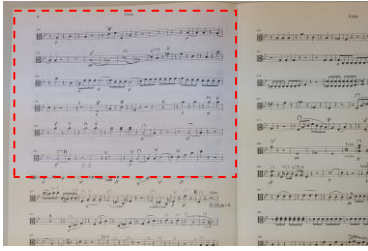


図1. ①は演奏の順番を、②は譜めくりのタイミングを示す。別紙裏面には次頁の上部が写し込まれている。①を演奏し休符で②別紙をめくり③④を演奏。そのまま楽譜をめくらずに別紙⑤で次頁部分を演奏し、途中休符の長いところで⑥譜めくりをして次頁の続きを演奏する。別紙を差し込むことで譜めくりのタイミングをずらし、弦楽器奏者の全員譜めくりによる演奏の中断を防ぐ工夫をしている。

ボウイングの書き込み



図2. 全ての弦楽器パート譜に、ライブラリアンが鉛筆で書き込んでいます。

必要のある曲の数は、実際は公演全体に対してそれほど割合ではないため業務を圧迫するほどにはなっていません。

取材／高木誠一・塚田総

意気込みもコロナに阻まれて

3月の退団から早くも半年余りが経とうとしています。

その間、新型コロナウイルスの猛威により世の中は大変なことになってしまいました。それまで当たり前だった日常が突然当たり前ではなくなり、ステイホーム、在宅テレワーク、3密、クラスター、飛沫、自粛要請など、これまであまり聞くことのない言葉が毎日のように飛び交い、このウイルスの猛威がいつ終息するのか未だに先行きが見えません。

私たち音楽業界もその影響を大きく受け、3月以降はオーケストラに限らず日本中のほとん

どのコンサートが中止になりました。

2月の名曲コンサートを最後に札幌の公演もずっとできない日々が続き、その中で私は19年間お世話になった札幌交響楽団を退団しました。

その後4月からは母校である国立音楽大学の准教授に就任し、東京での生活が始まりました。

就任1年目ですから慣れない仕事を一つ一つ覚えていくという意識でいたのですが、こちらにも新型コロナウイルスの影響により大学の学事予定が大幅に変り、4月一杯は自宅待機となりました。自宅待機中はSNSを使って専任教員と

実験や試行錯誤を重ねて感染拡大防止策を施し、7月頃から少しずつ演奏会が開催され始めました。札幌も8月に演奏会が開催されたとの記事を拝見し、とても嬉しく思いました。

その間クラウドファンディングなどで札幌を応援してくださる皆様から多くのご支援をいただいた事も知りました。退団はしましたが、私も札幌が大好きなので、皆様からの暖かいご支

渾身の演奏会は感動の極みへ

そして更なる高みへ

元札幌交響楽団フルート首席奏者の高橋聖純さんは、札幌の演奏会ではいつも最初にステージに登場し、大柄でオールバックの風貌で目立つ一方、札幌カラオケの要として数々の名演奏で活躍されました。

19年間在籍された札幌を退団すると知ったのは3月初め。3月の定期は中止となり、敬愛する聖純さんに感謝を伝える機会は失われてしまいました。

4月から母校の国立音大で教鞭を取り、後進の育成に携わる転身と知り、エールを贈りながら直接拍手を以って送り出したかったです。まさか2月の札幌東京公演が拝見する最後の雄姿になるとは思いもしませんでした。

援に感謝の気持ちでいっぱいです。世の中のみなが大変な思いをして苦労しながら、それでも感染に気をつけて前へと進んでいく時がこれからも続くと思えますが、皆様がずっと健康でありますように。いつかまたお会いできる日を楽しみにしております。

元札幌フルート首席奏者
高橋聖純

この日(8月26日)のプログラムは1曲目が武満徹の「巡り」。無伴奏の曲で、深い悲しみを感じさせる特殊奏法が嗚咽や無念さを表現し、渾身の演奏に息を呑みました。

2曲目は古き良き時代が心に浮かぶ「浜辺の歌」
3曲目はピアノとの掛け合いが印象的で面白い、フンメルフルートソナタ。
4曲目はフルートの魅力が引



(写真協力 藤田雅さん)

札幌のフルート奏者2人も加わって

そしてアンコールのために再登場。ここでは19年間育ててくれた札幌への想いと愛着が語られ、「挨拶も出来ずに去る事は何かの運命だと受け入れ進むしかないが、落胆は隠しきれなかった」と当時の心情も述べられました。ここでサプライズ。札幌のフルート奏者2人「川口晃さん(副首席)と福島さゆりさん」が客席から壇上へ加わり、3人による「くるみ割り人形」から「葦笛の踊り」を演奏。

5曲目の童謡「里の秋」は郷愁を誘い、ゆったりとした時間が流れるかのよう。終曲は3楽章のファンタジーの情熱的なリズムが息つく暇なく歌い続け、フィナーレへいざなうバートンの「ソナチネ」で、拍手喝采。ここまでで充分コロナ禍のうらぶんが晴れる聖純さんの魂のメッセージでした。それにしてもこの日の聖純さんは極度に緊張をしているのか、譜面台と自分の立ち位置を微妙に何度も変え、額や唇を拭き落ち着かない仕草は見た事がなく、特別な想いと気迫に圧倒されました。加えて藤田雅氏のピアノは素晴らしく、フルートとの掛け合いが見事でした。

高橋聖純さん、今後は若い音楽家を育てる指導者として活躍されることを願っています。素敵な演奏の数々、ありがとうございました！
またお目に懸かれることを楽しみにしております。

会員／深井雅昭

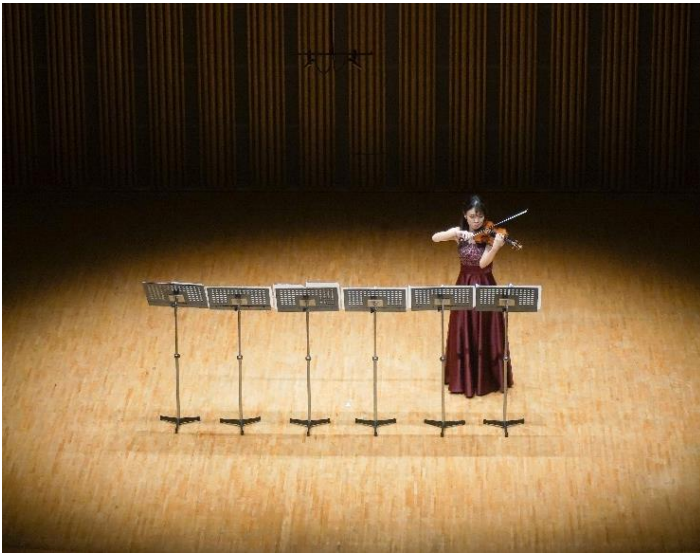


(写真協力 藤田雅さん)

ピアノは藤田雅さん

5月からはオンラインで、6月からは対面とオンラインの併用で授業やレッスンを始め、国立音楽大学も少しずつ普段の姿を取り戻しつつあります。

自宅待機で会議をしていた4月頃から日本のオーケストラ業界も



クルターク「サイン、ゲームとメッセージ」を演奏中

(写真協力 札幌コンサートホール Kitara)

心に沁みる鮮烈な演奏

晩夏の宵、待ちに待った飯村真理さんのリサイタルを聴くことが出来た。

ステージに大人っぽくなった飯村真理さんが立つ。ヴァイオリンが鳴りだすと、ホール全体に虹が架かった。パツパを弾く彼女は妖精なのか？

今まで数多のリサイタルを聴いたけれど、今回は次元が違うように感じた。プログラムの構成にも彼女の知性と意欲があふ

れ出ていて、解説は彼女の意図が明確で只々感服する。人間の細胞は真に感動すると一個一個が喜びに震えるのだろう。全身が泡立つような感覚を覚えた。

イザイはよく聴くが、こんなに魅力があつたとは知らなかった。クルターク、ベリオ、は初めて聴いたのに、「何かこれ好き！」と心が眩く。

半年ぶりにコンサートホールで聴くヴァイオリンは私のこころに深く沁み入る。

るに深く沁み入る。

21世紀の今、20世紀の作曲家の曲はまだ現代音楽なのかな、などと音に酔いながら、パツパから300年では音楽がこれだけ変化して当然か！などと次々と想念が広がった。以前バルセロナのピカソ美術館で彼が14才の頃に描いた絵を見たとき、あまりの完成度の高さに圧倒され、「この若さでこんな絵が描けるなんて全く常人ではないな、これじゃ92年の年月で絵があのように変化して行くのは必然なのか」と感じたのを思い出したりした。

それにこのコンサートには特別な思い入れがある、飯村真理さんに18年暮れにインタビューをした際にリサイタルは当分

知性を刺激したりリサイタル

ヴァイオリンのふくよかな音像が放物線を描きながらホール空間を満たし、会場を埋める空気が知的な賢者のため息のように震えた瞬間、CD鑑賞では決して味わえない幸福感が僕の胸のすみずみを満たした。僕にとつて半年ぶりの生演奏体験である。コロナ・ウィルス騒動による飢餓期間が永かっただけに、どれだけこの瞬間を待ち望んで

来たのだろうかとおっしゃったので、「キタラの主催で若いひとのための何かあるはずよ」と言ったことがあった。

後日、彼女から「Kitaraアーティスト・サポートプログラムに応募して無伴奏のリサイタルをさせて頂けることになりました。きっかけを与えていただいたありがとうございます」とのメールを受け取った。彼女の礼儀正しき、気づかいに感心した。それが19年春だった。以来待ちに待ったこの日、延期にはなつたけれども、中止にならなくてよかった。

キタラに感謝する。

会員/井上明子

8月26日の飯村真理(札幌交響楽団副首席奏者)ヴァイオリン・ソロリサイタルは、高度の次元で聴く者の知性を刺激する演奏会であった。会場で渡された解説が要領よく示していた通り、しっかりと方針に基づいた、大胆かつ意欲的なプログラム構成にまず敬意を表したい。

Bach and Beyond — 無伴奏ヴァイオリンの300年間 —

Bach and Beyond
無伴奏ヴァイオリンの300年間

2020 8.26 Wed
19:00 開演 18:30 開場
札幌コンサートホール Kitara 小ホール

プログラム
J.S. バッハ：無伴奏ヴァイオリンのための16曲第3巻 全曲演奏 BWV1006
L. ヴェイ：無伴奏ヴァイオリンのためのナタ第2巻 4曲演奏 Op.21-2
クルターク「サイン、ゲームとメッセージ」より「サイン、ゲームとメッセージ」巻
J.S. バッハ：マタソングブック
J.S. バッハ：無伴奏ヴァイオリンのためのナタ第3巻 全曲演奏 BWV1005

チケット料金 (全席自由席) 一般発売：2020年5月16日
一般：2,500円 学生：1,500円

Kitara Club 会員料金 一般：2,000円
Kitara Club プラチナ会員特別価格 2020年5月15日
Kitara Club 二重奏者特別価格 2020年5月14日

チケット予約先：Kitaraチケットセンター (011-520-1234)
お問合わせ：bachandbeyond2020@kitara.com

主催：Bach and Beyond 実行委員会、札幌コンサートホール Kitara 協賛：札幌交響楽団

ヴァイオリンの300年間—のタイトルのもと、ヴァイオリン音楽のバイブルとなつて久しいパツパの2曲(無伴奏ヴァイオリンのハの2曲)を無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第3番ホ長調BWV1006、無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ第3番ハ長調BWV1005)が両端に置かれ、加えてイザイ、クルターク、ベリオの、20世紀以降の無伴奏ヴァイオリンの難曲が披露された。

パツパの作品には日常的に親しんではいたものの、それ以外の現代音楽への鑑賞能力に自信が持てない僕ではあるが、演奏された作品群への奏者の熱意は十二分に伝わってきたし、高度な緊張感の持続的維持が作品に格調をもたらし術士(術)を実感することができた。

若い芸術家の知性あふれるチ

会員/村岡範男

オーボエの魅力をつつぷり

9月16日(水)、キタラのホールは満席であった。

待ちに待った「関美矢子オーボエリサイタル」。半数の席が着席できない席として整然と並んでいたが、チケットは発売後すぐに完売したというのだから、満席に違いない。

演奏会の前半はバッハの「オーボエ協奏曲」とラヴェルの「クープランの墓」という純クラシックであった。バッハの曲は「チェンバロ協奏曲」として聴き覚えがあつたが、「オーボエになる」と雰囲気がいかに変わるものか」という印象を持った。

伴奏をしていた永沼絵里香さんの独奏でショパンの「夜想曲第5番」が演奏された。

後半はモーツァルトの「オーボエ四重奏曲」から始まった。オーボエが存分に活躍するこの曲はこの日、弦楽器の絶妙な伴奏によって、オーボエが一層浮

き立って聞こえてきた。小さな「オーボエ協奏曲」といわれるのも肯ける演奏であった。モーツァルトのあとにはオーボエ、ピアノ、弦楽器の五重奏で三曲(「風笛あすかのテーマ」「モリコーネの贈りもの」「プエノスアイレスの春」、いずれも直江香世子さんによって編曲されたものである。



五重奏で直江香世子さん編曲の3曲を演奏

札幌メンバーの岡部亜希子さん、鈴木勇人さん、石川祐支さんがリレー方式で次々に演奏曲目を紹介するという趣向も面白かった。札幌ファミリーを感じさせる一場面であった。小冊子としてのプログラムそのものも個性的で、立

派なものであった。そこでは愛らしい子猫がオーボエを吹きながら、「オーボエの魅力」について語っていた。「甘美な音色(ねいろ)」と独創的な表現力に多くの作曲家が惹かれて、美しい旋律が生まれたのです」と。そのオーボエの魅力を今回、関美矢子さんのすばらしい演奏によって、心ゆくまで堪能することができた。

アンコールのあと、鳴りやまない拍手によって五人が何度もステージに呼び戻されたのは、すばらしい演奏への満足と感動、それに加えて生演奏への「飢えと渇き」が満たされたこととの表れであったに違いない。

会員/村山英朗

札幌くらぶでは5月末に全会員に札幌交響楽団への支援金募集を呼びかけました。その結果、7月上旬までに793000円の募金をいただき、7月26日の札幌くらぶサロンの席で、上田文雄会長から鳥居和比佐専務理事に贈呈致しました。その後も寄付金の申し出があり、合計金額は803000円となりました。会員の皆様のご協力にスタッフ一同感謝申し上げます。



支援金は 803,000 円になりました

第30回 札幌くらぶサロン

次回の「札幌くらぶサロン」は2021年1月16日(土)、18時より豊平館にて開催します。ミニコンサートには札幌ウァイオリン首席奏者、桐原宗生さんをお招きしています。

スタッフの活動報告

- 3月19日(月) 会報第89号発送作業
- 3月23日(月) 運営会議
- 7月6日(月) 運営会議
- 7月26日(日) 第29回札幌くらぶサロン 札幌へ支援金贈呈
- 8月24日(月) 運営会議
- 9月10日(木) 会報第90号発送作業
- 9月28日(月) 運営会議
- 10月23日(金) 札幌市内中学校吹奏楽部招待事業 あやめ野中 18名
- 11月10日(火) 会報第91号発送作業 運営会議

詳細は **札幌くらぶ** 検索で

スタッフの声

札幌の定期や名曲演奏会時にキタラのロビーに出している札幌くらぶのサービスカウンター。終演時に三々五々集まって感想を語り合うのが楽しみだった。またここで新規入会の申し込みをしてくださる方も年々増えていた。それが、今「3密回避」でできなくなっている。キタラの長期改修工事とも重なって当分お預け。来年の7月キタラ再開の時にはこの状況が終息してまた今まで通り皆と「密」に語り合えることを願っている。(定政)

演奏の途中、楽章と楽章の間で拍手をするのはどうだろう。多くの人は「ここは拍手をするところではないぞ」と思うのではないだろうか。先日テレビ放送されていた関西フィルのマーラーの「巨人」では各楽章が終わるたびに拍手が送られていた。指揮者、藤岡幸夫氏のコメントが意外だった。「私たちはうれしんです。お客さんの中に新しいお客さんがいるということですから。」深く納得した。(飲み鉄)